



2024（令和6）年度

二中だより



第16号 2024（令和6）年7月17日 発行責任者 加賀谷 登

校内人権作文意見発表会及び意見交換会 7月9日（火）5・6校時



前号に引き続き、「校内人権意見発表会及び意見交換会」の作文を紹介します。

また、作文意見発表後の意見交換会の写真も掲載させていただきました。紹介したのは一部分で、多くの生徒たちが感想や意見を述べてくれました。

前向きで明るい、温かな世界を

2年1組 桑田 美羽

「ポジティブシンキング」

みなさんも一度は耳にしたことがあるでしょう。意味は物事を前向きに考えることです。そうすることで過ぎていく一日一日をより鮮やかに素敵なお方へ導くことができます。「そんなのできっこない」「それができれば悩んでなんかない」そう思う人もたくさんいることでしょう。確かにそうです。いつも前向きに考えられるなら苦労はしません。どんなに悪くても「いつも前向きに」なんて不可能です。人間なのだから、苦しみ、悲しみ、悩みは尽きません。一時的に隠せたとしても、いつかはあふれてしまいます。では、どうしたら「ポジティブシンキング」を得られるのでしょうか。一緒に考えてみましょう。

例えば、あなたが学校へ行く途中、通り雨が降ってきたとします。あなたは何を思いますか？「雨合羽着なきゃいけない、最悪だ。」「濡れるやん。雨早くやんでほしいな。」そう思ってしまう人がほとんどでしょう。もし今、明るいことを考えることができたとしても、実際に起きると明るいことなんてなかなか思いつかなくなります。そんなときには、私は落ち着いてこう考えてみます。「もしかしたら、虹が見えるかもしれない。」「花や木に喜んでもらえるかもしれない。」同じ雨でも視点を変えてみると、今日一日が少し明るくなります。

では、自分の短所はどういう風にもいるのでしょうか。自分の短所を思い浮かべてみてください。「自分は短所ばかりだな」そう思う人もいると思います。しかし、それはそれだけ長所もあるということです。短所は視点を変えてみると長所にもなります。人見知りなのは、仲の良い少数の人を大切にしていること。飽き性なのは、楽しいことを探し続けることができている証です。ネガティブなものも悪くありません。それだけじっくりと考えられているということだと私は思います。

短所は上手く扱えば、武器にもなります。なぜなら、自分の「弱さ」を知るきっかけにもあるからです。「自分はこれが苦手だから、こうすれば乗り越えられるかもしれない」という風に、自分の弱さを認めて、それだけでなく、相手の苦手も認めて、こうしていこうと改革していくことも可能です。

また、短所は自分たちの大切な「個性」です。みなさんは最近、自分を嫌いになっていませんか。自分を一番よく知っているのは自分です。自分を一番愛せるのも自分です。自分で自分をいじめず、受け入れられるようになりたいですね。だからといって、自分を甘やかすのもよくないです。私も、自分のことが大嫌いだった時がありました。優柔不断で本当に言いたいことも言えず、ニコニコしながら独り苦しんでいました。この時の私は焦っていて気づけませんでした。が、「決断したり、主張したりする役」は自分にはあっていなかったのかもしれない。では、どうすれば役に立てるのかを考えてたどり着いた答えは、「まとめ役」をすることです。自分の意見がなかなか言えないのであれば、周りの意見を聞いて、優柔不断さを一種の公平さとして活かせば、みんなの意見も自分の意見も有効的に活用できるのではないかと思います。

このように、弱さがあったからこそ、出会えた強さがたくさんあります。ネガティブな要素や出来事がたくさんあったからこそ、小さな幸せがたくさん出会い、いろんなことをポジティブに考えることができました。あなたを取り巻くもの全てに悪い面はあります。でも、その中にはきっと小さな幸せが必ずあるはず。障がい者や外国人、弱い子ども、今暗闇に飲み込まれてしまいそうな人もみんな、ネガティブ、ポジティブ両方を味わうことのできる「同じ人間」だからこそ、私たちは成長を重ねることができます。成長を妨げる偏見、差別心、自分への呪縛。そんなものは捨てて、その代わりにいろいろな経験をして、たくさんの人と出会い、一緒にポジティブシンキングを育てていきませんか。みんなが幸せで、明るく温かな世界を一緒に作っていきましょう。



ALL・LIVES・MATTER

3年2組 岡 今日子 マヤ

4年前、アメリカで起きたある事件のニュースが、私のSNSに毎日のように流れてきました。2020年、アメリカで黒人男性のジョージ・フロイドさんが、白人警察官から過剰に拘束され、亡くなるという事件がありました。この白人警察官は、10分近い時間、伏せているフロイドさんの首に、膝を乗せた状態で押さえつけていたのです。フロイドさんは「呼吸ができない。助けてください。」と繰り返し懇願していました。しかし、彼の訴えは聞き入れられず、そのまま亡くなってしまったのです。のちの検察側の証人によると、フロイドさんは「袋の中の魚のように、ゆっくり意識を失っていった」そうです。

このニュース記事を読んだとき、私はフロイドさんのことを想像して、どうしてこんなことが起こってしまったのか、心の底から悲しくなりました。

この事件を聞いたアメリカの人たちは衝撃を受け、許せない人種差別だと捉え、社会問題になりました。全米各地で抗議運動が起こり、「BLACK・LIVES・MATTER」（黒人の命を守れ）という大規模な社会運動に発展しました。

実は、このような事件はこれまでも何度も起こっており、毎年約250人以上の黒人が警察官の過度な取り締まりや銃撃によって命を落としています。これは人口比率で考えると、白人の三倍以上もあり、明らかに異常と言えます。

私自身も、アメリカの小学に通っていた頃、肌の色や髪の色に対することや、自分が持って行くお弁当の、特にカレーやおにぎりについて、差別的な発言をされ、嫌な思いをしたことがあります。こんな風に、見た目や習慣の違いに対する差別は、アメリカだけではなく、いろいろな人種の住む、世界のどの国でも見られると思います。

人種差別は、解決するのがとても難しい問題です。人は自分と違うものや知らないものに対して不安感や恐怖感を抱いたり、それらを排除しようとしたりする傾向があります。逆に、自分の属する集団や文化を好ましく思ったり、高く評価したりします。こういう心理的なバイアスが無意識に存在しているように思います。そう考えると、私がショックを受けた友人たちのコメントも、無意識に起こる、異質なものに対するネガティブな感情から生まれたものだったのかもしれない。彼らは明らかな悪意をもっていなかったのだらうと思います。ただ、そうだとすると、私がああとき言われた友人たちからの言葉は、今思い出しても悲しいものです。

人種差別を解消するのが難しいのは、先ほども述べたように、差別をしている人々が、明らかな悪意をもっている人だけではないからです。皆さんも、自分の行動や発言が差別とは思わず、自分の中にある偏見や思い込みに気づいていないことはありませんか。また、発言する側が、差別だと思っていなくても、受け取る側が不快に感じたり、傷ついたりすることがあるということ意識していますか。人種差別をなくしていくためには、人の心から偏見を取り除き、すべての人が平等な社会を実現する努力が必要です。それは、私たちが多様性を尊重し、すべての人がもつ価値を認め合うことから始まると思います。

フロイドさんは亡くなる直前に、何を考えていたのでしょうか。もしフロイドさんが黒人ではなく白人だったら、どのような結果になっていたのでしょうか。人の命は、こんなにも軽いものなのでしょうか。人の命をこれほど軽く扱ってしまうほど、人種差別とは根深いものなのでしょうか。その後起こったBLM運動は確かに大切だとは思いますが、「BLACK・LIVES・MATTER」（黒人の命を守れ）ではなく、「ALL・LIVES・MATTER」（みんなの命が大切）の方を広めるべきだと、私は考えました。誰もが一人の人間として、他者と対等に向き合い、自分の言葉で、自分に自信をもって語り合える世の中になれば、こんなに幸せなことではないでしょう。

私たちが目指すべき未来は、肌の色や髪質、民族や出身地に関係なく、すべての人が平等に機会を得られる社会です。次の時代を生きる私たちの世代が、教育を通じて異文化を正しく理解し、自分のなかで深める必要があります。人種差別のない社会が実現できるかどうかは、今の私たちの何気ない日々の中で試されています。

そこで、この言葉を合い言葉にしてみてもどうでしょう。

「ALL・LIVES・MATTER」（みんなの命が大切）